

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

近代的責任論の構図において出発点をなす自由意志の存在が以上の検討により疑問視された。次には行為とそれに対する責任との関係に視点を移して考察しよう。犯罪行為をなしたが故に責任を負うという因果的理解に落とし穴はないだろうか。

イ 行為の因果関係で責任を捉えると、刑罰を与える上で不都合が起きる。酒を飲んで運転し、注意力が鈍ったために横断歩道の前で徐行しなかつたとしよう。そこに運悪く子供が飛び出して来て轢き殺す。運転手は実刑判決を受け、自らの過失を悔やむ。しかし子供が飛び出さず事故が起きなければ、飲酒運転自体は平凡な出来事として記憶にも残らない。行為者に無関係な運が犯罪事実を左右するならば、責任は行為の因果関係で把握できない。

ロ 自由と責任の関係は論理が逆立ちしている。自由だから責任が発生するのではない。逆に責任者を見つけないければならないから、つまり事件のけじめをつける必要があるから行為者を自由だと社会が宣言するのである。自由は責任のための必要条件ではなく逆に、因果論的発想で責任概念を定立する結果、論理的に要請される自営的措置に他ならない。自由意志は密輸入されたデウス・エクス・マキナだ。

ハ 犯罪が生じ、社会秩序が破られると人々は感情的に反応する。したがって怒りや悲しみを鎮め、秩序を回復するために犯罪を破棄しなければならぬ。しかし犯罪はすでに起きてしまったので、その犯罪自体を無に帰すことはできない。そこで犯罪を象徴する対象が選ばれ、この犯罪のシンボルが破壊される儀式を通して共同体の秩序が回復される。このシンボルが犯人Ⅱ責任者の正体だ。こうして精神病者・子供、そして犯行と無関係な家族や村人だけでなく、死体・動物・植物・無生物さえも、歴史・文化に応じて責任者として罰せられてきた。

ニ 「原因」のギリシャ語 *aitia* (アイティア) はもともと「罪」を意味していた。我々が今日考えるように自由と行為を司る因果律を基に責任概念が派生したのではない。その逆に責任や罰の方が因果律よりも基礎的で重要な観念をなす。因果律など知らないうちから、人間は責任や罰とともに生きてきた。

ホ 因果関係は自然界のあり方ではなく、人間の習慣や社会制度が作り出す表象だとヒュームは考えた。因果関係は当該事象に内在するのではなく、複数の事象を結びつける外部観察者によって構成・感知される。この説が正しければ、責任の帰属判断と因果関係とを区別する意味が失われる。藁

人形に針を刺せば、憎い人間を呪い殺せると信じる文化においては、これがまさしく因果関係の客観的記述である。つまり責任因果説の妥当性を検証する以前に、因果律自体の歴史・社会性を問わなければならぬだろう。

人間は身体を持つ。生き物としての人間、生身の身体が世界秩序を作る。心の論理と社会の論理にしたがって我々は日々判断・行動し生きている。責任はあくまでも社会・心理現象であり、歴史条件や文化背景を超越する普遍的責任はない。

(引用先 小坂井敏晶「責任―責任概念と近代個人主義」)

問 次の一文は、本文中に入るべきものである。もつとも適切な箇所を、 の中から選びなさい。

そもそも因果律は客観的に存在する関係なのか。